

研究ノート

## 日本人抑留記にみるロシア人 阿部軍治『シベリア強制抑留の実態』を読んで

木村英亮

### 日本とロシア

日本が鎖国する少し前まで、ロシアは遠いヨーロッパの国であった。ウラルの西、いまのタタリスタンのあたりにタタール人のカザン・ハン国があり、そこがロシアの東の境界であった。しかし、徳川幕府が成立する少し前、すなわち鎖国の前1552年にイヴァン雷帝がカザン・ハン国を征服し、以後ロシアはシベリア、極東に急速に領土を広げ、ロシア人が移住し、日本が開国したときはロシアは隣の国になっていた。ただ人口は多くなく、現在でも、日本に近いシベリア、極東地方あわせロシアの4分の3を占める面積に3000万人程度である。

この隣国となったロシアと日本とは、近いとは言えなかった。日本は、日清戦争で獲得した関東州をロシア、ドイツ、フランスの三国干渉によって清国に返還させられ、ロシアはその代償として旅順、大連を租借した。まもなく日本は日露戦争に勝ち関東州を回復した。このように対立しながらも、トルストイをはじめとするロシア文学もよく読まれた

ロシア革命以後日本政府はソ連を共産主義国として警戒、情報を統制し、両国関係は限定されたものとなる。ロシア語の本は買いにくく、ソ連研究は大学でもできず、満鉄調査部、外務省、ロシア正教会、東亜研究所などでしか許されなかった。ロシア革命後の軍事干渉、張鼓峰事件、ノモンハン事件などで、日本は敗北したが、そのことは自覚されなかった。

第二次世界大戦後日本はアメリカに占領され、冷戦下の反共的な占領体制に続き、日米安保条約によってアメリカ側に組み込まれ、ソ連とは遠くなった。ペレストロイカ期、ソ連への関心が強まったが、崩壊後はふたたび遠い国になっている。

ここに注目すべきことは、戦後60数万人の20歳前後の若い日本人が「シベリア抑留」という形でロシアでの生活を体験し、ソ連・ロシアおよびロシア人と密接な関係をもったことである。かれらは、外交官や研究者、貿易会社社員としてではなく、抑留者としてロシアの農民など庶民と接したのである。これはとくに日本人のロシア人との関わり方としては珍しいものである。

私は10月15日に千葉工業大学市民講座で、「ソ連体制のなかのロシア人」というテーマで話す機会があり、抑留者の手記を素材としたが、その直後に、阿部軍治『シベリア強制抑留の実態、日ソ両国資料からの検証』（彩流社、688ページ）が出されたことを知り、読むことが

できたので、その紹介をふくめ講演の骨子をまとめた。

### 抑留者の人数について

阿部は、多くの抑留記にもとづいて、シベリアの自然条件、革命前のシベリア流刑、施設と設備、管理と処罰、死者の埋葬状況などと、章、節別に、シベリア抑留問題を総括的に整理している。

出発点としてまず、抑留者、死亡者の人数について、1956年のソ連内務省の文書の、日本人抑留者総数60万9448人、引揚げた者54万6752人、死亡者6万1855人、戦犯として服役中の者1030人という数字をあげている。これはペレストロイカ後セルゲイ・クズネツォフが引用している数字である。日本側資料では、抑留者総数は約70万人程度としており、ソ連側の資料による死者6万人程度という数字は信じ難く、ソ連への強制連行以降における犠牲者は、少なく見積もっても十数万人にのぼると推定される（阿部・455）。たしかに、引用されている例を読んでも、貨車での移送状況はひどいものである。この死者の人数は、これまでの個々の抑留記には抜けていた重要な指摘である。

死亡状況は、施設・作業・給養の良否によって収容所によって3-15%と差がある。最初の冬は栄養失調によるものが60-70%を占め、1946年以降は疲労の蓄積による結核死亡者が多く、46年冬には栄養失調死亡者がふたたび若干増加している。第13章には、くわしい医療・衛生状況が、掲載、分析されている。

一冬で1000人が400人になった例や1500人が1000人に、1000人が700人に、1000人が500人に減った例、1週間で500人のうち270人がパラチフスで亡くなった収容所などがあげられている。第6章に例示されている営倉などの処罰の状況も恐るべきものである。まさにこの世の地獄であり、抑留問題を扱うにあたり、最初にこの悲惨な状況を挙げておきたい。

抑留者の産業分野別配置については、バイカル・アムール鉄道建設に15万人、鉄道企業2.7万人、石炭採掘8.65万人、工場・港湾建設6.9万人、木材調達5.9万人、鉍石採掘4.6万人、兵舎建設3.6万人、軍需工場作業4000人、民間工場1.6万人、石油採掘6500人という数字が紹介されている（83）。収容所およびその分所は、ソ連全土にあり、1629-1729であった（155）。

巻末には、阿部が作成した17ページにわたる収容所配置概要、16ページの抑留地域別死亡者表、折込の埋葬地地図が付されている。

### 抑留の目的について

ソ連の日本人抑留の第一の目的は、労働力としての使役で、第二に補足的に、日本革命のための要員を獲得、教育することであった。1945年9月の訓令には、「軍事捕虜の労働利用は、ソ連邦の産業及び建設の必要性並びに戦争によってもたらされた損害解消という課題に立脚して、ソ連邦国家防衛委員会の決定と内務人民委員部の指令に基づいて実施される」（阿部・264）と定められている。ほとんどの職種で作業ノルマが課せられ、達成できないと罰せられた。「日本人の勤勉かつ高い『労働能力』は、彼らが就役した至るところで多くのソビエト人たちを驚かせ、かなりの場合賞賛を受けたのである」（272）。抑留者管理の観点からみると、1946年8月ごろまでの、作業大隊が日本軍隊の編成のままでおこなわれた第一段階、47年3月までは過渡的な第二段階、各分所に反ファシスト民主委員会が結成され、選挙による委員会が統制管理するようになったそれ以降の第三段階と3つの段階を経た（273-274）。

木材伐採、鉄道建設、炭鉱労働などとともに土木・港湾工事や建物の建設に従事し、コムソモリスクやハバロフスクでは、かれらが建てた病院や学校、住宅などが現在でも使用されている。凍土、設備・道具の不十分さなどの悪条件のため作業は困難であり、シベリア珪肺など労働災害も頻発した。阿部は、たとえばバム鉄道の建設への日本人抑留者の働きと貢献について、ソ連・ロシアの文献などにまったく記述されていないと記し、正当な評価を求めている（318）。

使役の観点が強く、教育の観点が薄かったことは、中国の八路軍との大きな違いである。

山極晃は、『米戦時情報局の「延安報告」と日本人民解放連盟』（青木書店、2005.）で、中国八路軍と米軍の日本人捕虜の扱いの違いについて、米軍は緊急の軍事情報を得ることを主眼としたのに対し、八路軍は長期的な政治戦争を重視し、この戦争が不正な侵略戦争であることを日本人捕虜に理解させようとした、と書く。米軍は、捕虜政策や心理戦争よりも軍事手段を重んじたのに対し、八路軍は、軍民の教育が行き届き、捕虜優待政策が前線地域でも実行できた。日本人捕虜は、米軍の軍事力、食事、医療などの物量に圧倒され、劣等感をもったが、中国軍に対しては、勝利を信じ、民族的蔑視をもつものが大部分であった（山極・序6-7）。

ソ連の日本人抑留者は、軍事力に圧倒されはしたが経済的な貧しさには驚き、ロシア人観は捕虜になってはじめて形成したようである。酷寒で食料がなく、かれら自身、それが国際法にも違反しているものと考えており、抑留を納得していなかった。

### 日本政府の責任について

日本人のシベリア抑留に、日本政府あるいは日本軍部に直接責任があるという見解がある。すなわち、1945年8月初めモスクワ駐在佐藤尚武日本大使は、政府にポツダム宣言の即時受諾を促ししていたが、東郷茂徳外相は天皇の意向を受け、特使として近衛文麿をソ連に派遣し、その仲介で有利な講和を達成しようとした。その内容は、近衛と退役陸軍中将酒井高次の起草によるもので、天皇制の維持を絶対的とし、千島列島北部、沖縄、小笠原諸島、南樺太の放棄とともに、海外にある一部の軍隊の労力の提供も含んでいた。結局、ソ連は近衛を受け入れなかったが、内容はモロトフ外相に伝えられていた。また、8月19日、ワシレフスキー元帥と秦総参謀長が沿海州ジャリコーボで停戦交渉を行った際同席していた参謀瀬島龍三の言動が疑われた。事實は、8月23日のモスクワからのスターリンの移送命令によるものであることが明らかになっている。しかし、日本政府の姿勢は、批判を免れることはできないであろう。なお近衛文麿の長男文隆は、満州で逮捕され、1956年10月イワノヴォ州の収容所で病没した。

阿部は、「日本側の意見や希望にはほとんど関わりなしに、スターリンのソ連政府は最初から（一時的に変更の計画はあったかもしれないが）強制労働に使役する計画をもっていたと考えている。また、シベリア抑留は北海道半分占領を拒否されたことに対する代替であるという説は、当初日本人受け入れ態勢が十分できていなかったことなどを考慮すると確かにあり得ることとは思ふ。しかし、それは決定的な要因ではなく、当時のソ連の戦争による国土の荒廃と産業の崩壊、大量の労働力の喪失という状況が、大量の“軍事捕虜”を要求していたためだったと考える」としている（阿部・45）。

日中戦争のなかでの中国の日本人捕虜に対する教育は、よく準備され、実際に効果を上げ

たが、ソ連では、一人ひとりが、なまのロシア人に接することによって、自分でソ連観を形成した。ソ連には、のちにソルジェニーツインの『収容所群島』などで日本で詳しく知られるようになったように、全土に強制収容所があり、多くのソ連人が囚人としての生活を送っていた。飢餓と酷寒と厳しい労働という極限状況は、収容所の内外のロシア人たちも似たような条件であり、そこで接したロシア人の人間性は強い印象を与えた。

ここで形作られたロシア人観は、ソ連が崩壊しても影響を受けないような生のもので、それだけにいつまでも残り、帰国後の抑留者の言動や、かれらが書いたおびただしい記録などを通して、戦後の日本人全体のソ連観に大きい影響を与えた。

1945年8月から49年秋まで抑留され、帰国後50年に『極光のかげに』（岩波文庫、1991・最初の出版は目黒書店）を出版した高杉一郎は、その本に「私は囚人や労働する貧しい人たちのなかで、ロシアの民衆とともに働きながら、彼らとはげしく抱きあったり、どろんこになって争ったりしながら、ソヴィエトを理解したのだ。」（高杉・350-51）と書いている。この本はすぐれた抑留記として評判になり、阿部の本にも何度も引用されている。91年に岩波文庫にいられたが、高杉は、その前後90年に『スターリン体験』（同時代ライブラリー）、92年『シベリアに眠る日本人』（同時代ライブラリー）、96年『征きて還りし兵の記憶』（岩波書店）を刊行し、シベリア体験を繰り返し問うた。92年暮から93年初めにかけて、長砂実団長の下私もふくめ36人でロシアを訪問したが、高齢の高杉夫妻も参加され、帰国後出版した『「どん底」のロシア』（長砂・木村編、かもがわ出版、93）に「傷痕を癒す旅」を寄稿されている。

### 「民主運動」について

1945年9月15日にハバロフスクで、イワン・コワレンコを編集責任者として、『日本新聞』が発行され、49年11月7日まで650号発行された。浅原正基（諸戸文夫）、相川春喜（矢浪久雄）らがこれに協力した。コワレンコは、後70年代、ソ連共産党中央委員会国際部副部長として対日政策の直接の責任者であった。この新聞を中心として「民主運動」が盛り上がりを見せた。初期旧日本軍将校の私的制裁がシベリアにもちこまれ、兵士と下士官に死亡者が多くでる一因となった。中等教育はおろか初等教育も十分にうけていなかった多くの日本人兵士は、ソ連軍の将校と兵士が対等に談笑しているのを見て衝撃をうけた。帰国後牧師となった丸尾俊介は『語りかけるシベリア』（三一書房、1989）で次のように書いている。「ソ連軍の兵隊が、将校も交えて、ただただ口論しているのをよく見かけた。単なる喧嘩としか思えず、秩序の乱れた軍隊だとの印象を強くもっていた。しかし、それが彼らの批判会であり、ソ連人独特の相談形式の一つであり、社会性を身につける場にもなっていることを、あとで知った。ただ上からの命令に従うことがすべてであった日本の軍隊ですごしてきた私にとって、これは新鮮な驚きであった」（丸尾・94）。

「民主運動」の影響もあって、1946年春には、旧日本軍将校の力は後退した。しかし、その運動には、権威主義、教条主義があり、運動や生産競争の強要もあったとして評価が分かれる。

1916年生まれで東京大学在学中から反戦運動をおこなって40-42年入獄し、43年召集、45-56年抑留され、45-49年『日本新聞』の日本側編集者であった浅原正基は、『苦悩のなかをゆく』（朝日新聞社、1991）で、抑留者は、「集团的捕虜労働の“強制”システムのうえに、伝来的軍隊制度の階級的身分差別と非人間的隷属がのしかかった二重の圧迫にあえいでいた」（浅

原・7）と書いている。「民主運動」は、前者のシステムの枠内のものであり、その点でも当然限界があったであろう。浅原は、49年8月末突然内務省ナウモフによってスパイ・民族主義者として告発、逮捕され、56年まで拘留された。

この運動は、「私たち自身の内心からの発動に基づくものであった」（清水幾太郎・宮城音弥ら『かくソ連を見た』思索社、1949、大西宣彦・154）という発言もあるように、抑留者の条件を一定程度改善し、一部は帰国後共産黨員として活動した。

阿部は、「“民主運動”以前、旧軍体制のもと、将校や下士官や古参兵の横暴に犠牲になっていた一般兵士や初年兵たちがそれに反発して、大隊組織や旧弊を変えようとしていた段階には、その動きはそれなりの意義があったかもしれない。だが、運動の主体がアクチブたちの手に移ってからは、それはソ連側の目論んだ洗脳・思想教育の一環として利用されたのであり、トータルで見ると、いわゆる“民主運動”はマイナス面が多かったと結論づけていいであろう」とまとめている（阿部・544）。

1948年に、早期に帰国した大学出の抑留者の手記を集め、49年に出版された『ウラルを越えて』（乾元社）には、「吾々が帰国して先ず感じたことはなお日本にはかような（マルクス・レーニン主義に基づく社会主義国家の典型として評価する）観念的な考えをもっている人が決して少なくないことである。しかもそのような人があまりに赤裸々なソ連の現実を知らなすぎるのに一驚するのである」（岡崎至誠・205）。すなわち、中国での捕虜のように、戦争観、社会主義観が、身についたものは少なかった。

なお浅原は、高杉の抑留記について、「侵略戦争の加担者としての戦犯意識」が欠落していると批判している（浅原・53）。

### 戦争直後のロシア人の状況

戦争直後のソ連は貧しく、少しでも満州の財貨で補おうとした。そのため、満州の発電施設は5-6%しか操業できなくなり、機械製造設備は40-100%が撤去され、化学工業は平均50%、綿工業は8分の3を撤去された（阿部・107）。「衣類は極端に不足していたので、ソ連極東地区の一般住民が着ている衣服も満州などから掠め取って行った衣類が少なくなかった」（405）。これは、抑留者が酷寒のなかを外套なしに作業させられるということが生じた背景である。

その貧しさについて、先に紹介した『ウラルを越えて』からいくつか引用しよう。「大抵の家には毛布も寝具もなかった。・・・彼等は相変わらず馬鈴薯を食い土間に寝ていたし、敵愾心のごときはその跡形も見られなかった」（堀江正雄・172-173）。「（ソ連の諸民族は）広大な土地と苛烈な気候に育まれていずれもひとしく悠長であり忍耐力に富んでいる。吾々がハバロフスクにいた頃食料の配給がと切れてしまって、1946年の正月は3日間殆どお湯だけですましたことがあった。吾々はこれは重大な人権問題だとして衛兵に嚴重に抗議した。ところがその答えがふるって『食っていないのは君達だけではない。吾々も同様だ。配給所が休みだから仕方がないではないか』と云った塩梅で、てんで話にならない。・・・ハバロフスクやノボシビルスクのような大きな駅では、汽車待ちのため4、5日間も野宿していた住民の群で一杯であった。彼等は吾々にとって到底耐えられないと思われるようなことをすべてニチェボーで片づけている」（岡崎至誠・203-204）。「吾々の見聞したところでは一般農民の生活は極めて悲惨である。・・・しかし彼等にとって見れば、吾々が想像するほどの苦痛を感じていない。それは革命、飢饉、戦争と相次ぐ苦難に堪え得た強

韌な忍耐力と、鎖国政策により外国の農民の生活を知らないが故であろうと思われるのである」(204)。

「畑で働いているのは十中八、九人までが女で、それも娘達が多いのです。彼女達もあまり精出しているように見えないし、疲れ果てたようにぼんやりと佇んで、作業時間だから唯仕事場におるのだと言うように見えることが多いのです」(宮田修喜・159)。「本当ですよ、見たところ畑の農夫達も食物に困っているように思えます。春になると去年の掘り残しの馬鈴薯それも冬中寒さですっかり凍乾され不純物の多い澱粉の塊になってしまっているのを拾いまわっている子供ずれの女の姿を夕暮れの畑によく見かけます」(163)。

### ロシア人について

阿部は、「シベリア生き地獄の中で見出した人間」と題した第9章で、クイブシェフカ収容所近くで栄養失調状態で2人で丸太切り作業をしていたとき、大きい暖かいパンをポケットに押し込んで駆け去ったロシア婦人に感激していつまでも声をあげて泣き続けた18歳の若者について(阿部・330)、イルクーツクの収容所近くで、当時のソ連で他人に一尾与えるなど考えられないことであったのに、塩魚をくれた老婆について、帰国後も忘れられなかったというエピソードを抑留記から引用している(333)。

ロシア人は、英帝国植民地のイギリス人などと異なり、領土の拡大とともに、農民や労働者が移住し、現地の諸民族とともに暮らしてきた。このような歴史が、民族的な包容力、人種的偏見のなさを育ててきたと言えよう。

ソ連ではスラヴ系3民族、広義のロシア人(ロシア人・ウクライナ人・ベラルーシ人)がソ連の人口の70%を占め、ロシア人(ルスキー)はちょうど半分、ロシア共和国人口の81.5%(1989)であった。ソ連を構成していた民族は100以上あり、総称してソヴェツキー・ナロード(ソヴェト民族、ソヴェト国民、ソヴェト人)と言っていた。また、現在のロシア連邦は、ロシスキー・フェデラーツィアの訳であるが、このロシスキーもロシア人以外の民族を含む概念である(なお、ソ連時代のロシア共和国の正式名称は、ロシア・ソヴェト連邦社会主義共和国、現在はロシアまたはロシア連邦)。

いまロシア連邦には多くの共和国や自治州、自治管区などがある。そこに住むロシア人のアイデンティティはとても興味深い。たとえば、タタルスタンでは、ロシア人の19%がタタルスタンに、36.1%がロシア連邦に、35.3%は両方に帰属意識をもっている。タタル人は59%がタタルスタンに、2.7%がロシア連邦に、31.9%が両方にである。

ソ連解体前は、2530万人のロシア人が、ロシア共和国以外の14の共和国に住んでいた。これらのロシア人の大部分は、居住する共和国にでなく、直接ソ連に帰属意識を持っていた。たとえば、カザフスタンのロシア人はカザフ共和国の国民であるという意識はあまりなく、直接ソヴェト人、すなわちソ連のロシア人と考えていた。ソ連解体によって、これらのロシア人は、たとえばカザフスタンかロシアを選ばなくてはならなくなった。カザフスタンの国籍を選んだロシア人は、カザフ人とともにカザフスタン国民、カザフスタン人となる。

日本はソ連のような多民族国家でなく、これがロシア人と第一に異なる条件であるが、ロシア人の民族的偏見のなさの一つの背景として記した(拙稿「置き去りにされたディアスポラ・ロシア人」『国際政経論集』第10号2004.3.参照)。

### 高杉一郎・長谷川四郎らの著書から

甲板に男女が群れ、合唱の声を私のところへとどかせながら、ソヴェトの汽船がイルクーツクへゆっくりと遡っていく。「ソヴィエト権力の不吉なくらい面と、この民衆の明るさとはいったい何処でつながっているであろうか。・・・民族的偏見から自由な、わかちがたい一体となつてうたっている。富める者も貧しい者もなく、ひとつのソヴィエト・ロシアという大きな家族のメンバーがいるだけである」(高杉・75)。「シベリアの短い夏も終ろうとするある晴れた日に、密林のなかから子供の一団が手に手に小枝をもって河沿いに下りてきた。・・・それぞれに生活の匂いの強い思い思いの粗末な服を着た子供たちである。・・・元気者が小枝を差し出しながら、『おじさん、これあげる』『ありがとう。それなに』『山ぐみだよ。おいしいよ』彼の先例に倣って、みんなが手に手に持っていた小枝を争って私に渡す。私の腕にはたちまち一束の山ぐみの小枝が集った。・・・この子供たちは、なんともいえず明るい印象を私の胸に残した。ソヴィエトの民衆の民族的偏見のなさは、どんな頑なロシア嫌いをも感動させるのであるが、それはソヴィエト政府による教育機関を通じて、こんなに小さい学齢前の児童から教え込まれていると私は感嘆した」(79-80)。「俺たちは先ずなによりも人間であればいいわけだ。たとえば、君と俺とはいまこうやって向いあつて坐っているがねこれはつまり、ひとりの人間ともうひとりの人間が向いあつているんで、ロシアの囚人と日本の俘虜が向きあつてるんじゃない。そんな区別は、馬鹿や狂人のつくつたうわ言さ」(213)。

「兵舎のなかで、ソ連兵も日本人捕虜も、一緒に寝転んで、肩を組あい映画を見ている」(片岡薫『シベリア・エレジー』龍溪書舎1989・185)。

戦犯として1956年まで抑留されていた志田行男は、『シベリア抑留を問う』(勁草書房、1987)で次のように書いている。「通訳だから必要があつて事務所関係者を夕食時に訪問した際など、よくきかされた。君達に御馳走したいが、吾々の食卓も、ごらんの通り大したものがないのでね、あしからずといわれたことも何回かあつた。時折、所長を通じて部落民が日本の軍医に診療を依頼してくることがあつた。通訳として同行、食事を供されたこともあつた。村人たちの意識には、相手が捕虜だから云々というような差別意識は微塵もなかったから、気持よかつた」(志田・55)。「抑留体験は確かにつらかつたが、個人的に触れ合つたシベリアの人びとは純朴そのものだった。抑留されていた人びとも、戦争被害者としての立場に固執する余り、アジアの国々に対して、日本は加害者だつたことを忘れてはならない」とシベリア時代を回想し、ここから「かつて日ソ両国間に不幸な関係が存在していた事実の確認と、それを繰り返すまいとする決意がいま必要である」(226)と述懐する抑留者の声には強い説得力があり、歴史の教訓に学んだ謙虚さがにじみ出ている。

高杉一郎とともに、すぐれた抑留記を書いた作家長谷川四郎も、1952年に出した『シベリヤ物語』(旺文社、1974・最初の出版は筑摩書房)で、ロシア人をはじめ出会つた多くの人々について書いている。かれは1909年生まれ、満鉄調査部、満州国協和会調査部で働き、45年11月から50年2月まで抑留された。

「夫が病気で前線から帰る途中、交通事故で死んだという、コルホーズ事務所のマリーヤ・ゾロトゥヒナは、仕事では厳密で細かいが、私有の馬鈴薯はバケツにいっぱいゆでて兵隊たちにあふるまう。他のコルホーズ員によると、彼女の一族は、この村のボスである。

・・・マリーヤ・ゾロトゥヒナも、野菜の積込みにやつてきた『兵隊たち』に対し、捕虜

とか日本人とかいう観念を全然もっていなかった。彼女にはただ労働者という観念しかなかったように思われる。彼女は兵隊たちをただ、未熟な労働者として取り扱った。ぼくらが大きな馬車を曳いてきて、うっかり、畑の狭い入口のところで柵にひっかかり、動けなくなった時、彼女はやってきて、丁寧に馬車の扱い方を教え、車のはまりこんだ轍や、ひっかかった柵から馬車を解放するのを手伝った。彼女は罵言を口にしたが、それは兵隊たちに対するものではなくて、仕事がうまくいかないことに対してであった」(長谷川・17)。

長谷川はまた、ロシア人のさまざまな戦争観について記している。

「私の知り合ったシャターロフという中年男は、炭鉱の測量技師だったが、彼は私たちに向けてこう言った、『ごらんの通り、我々はぼろを着ているが、これで我々は勝ったのだ。戦争中、我々は戦争に必要なものしか作らなかった』そして、勝利の意義を説明して、こう付け加えた、-「我々には言う権利がある、-勝利は未来のある者に属す」と。思うに、これ以上誇り高い言葉はないであろう」(長谷川・35)。「彼は或る時、私たちを眺めて、しみじみとこう言った。『戦争は誰もいやだ。そして、この戦争を起こすものは権力だ』こういう彼の弱々しい声を聞くと、それはそのまま、ギリシャ正教会の、ソビエト政権に対する、怨恨を聞くような気がした。そして、そこにはトルストイの亡霊がさまよっているように思われた」(44)。「『戦争は』と彼は答えた。『戦争は人間がお互いに恐怖するから起きるのだ』私たちは日本語でがやがや話し出した。一人が彼を批判し、みなを啓蒙しようとして言ったのである(この人間は全く観念論者で、反動もいいところだ。)しかしボルシニコフは私たちの発する知らない言語の中で、全く無関心の顔つきをしていたが、やがて彼の方から言い出した。『今度起る戦争は自動爆弾の戦争だ』」(125)。

## 日本人論

抑留記には、極限状況の下におかれた日本人自身についても、きびしい批判、反省が記されている。ここには3人の著作からの引用で代表させたい。

1922年朝鮮に生まれ、45-50年抑留、平凡社、国立民族学博物館、創価大学に勤め、シベリア、中央アジアを研究し、『シベリアに憑かれた人々』(岩波新書)、『中央アジア遺跡の旅』(日本放送出版協会)、『北東アジア民族学史の研究』(恒文社)などの著書のある加藤九柝は、次のように記している。

「一般的に言って、収容所という独特の環境では、ソ連側の幹部の能力や誠意は勿論であるが、日本人側の幹部の態度、人がらなどによっても俘虜全体の生活条件がかなり変わってくるものである。大隊長、軍医、炊事長、通訳などの人たちが真に献身的に働くかどうかによって、俘虜が可能な範囲で住みよくなるかどうか決まるのである。これはドイツ軍の俘虜になったことのあるロシア人から聞いた話であるが、戦時中のある俘虜収容所でドイツ人と結託して一般の俘虜を苦しめたソ連側の隊長、軍医、炊事長、通訳たちは、ソ連軍によって解放されたとき、同じ俘虜の手で殺されたという」(『シベリア記』潮出版社、1980、171-172)。

丸尾俊介は、「乏しいなかだから共に生きていこうという姿勢は日本人のなかになかった。こうして多くのものが病におかされ、互いに疑い争い憎しみ合う不安定な関係におかれ、そしてかなりの人たちが息を引きとっていった。とくに初年兵の犠牲は多かったと思う」(丸尾・53)と書く。

志田行男も「内地版、シベリア版それぞれの戦後史のなかで、支配者と被支配者との相互



関係を積み重ねる過程での権力者に対する迎合主義。そこにみられる日本人の共通性は、何に起因していたのであったろうか。それは、個人の主体性確立という市民革命の未体験に根ざした、長いものには巻かれろ式の権力との野合、癒着ではなかったか。わが国政治風土の特質から、シベリア捕虜のスターリンへの感謝状署名運動だけを難詰して省みないならば、戦後史の総括を試みるうえで片手落ちのそしりを免れない」（志田・164）と記している。

### おわりに

阿部は、終章 贖われないシベリア強制抑留者たちの無念 でソ連の対日参戦やシベリア抑留についての言い分は不当で絶対に容認できないが、わが国も中国に対しては反省しなければならない、「結局この日露戦争での勝利がその後の軍部の強権化、帝国主義的政策の推進、無謀な大陸進出政策につながっていったと見られており、歴史的にはプラスにはならなかったのだ」（565）。その延長線の上にシベリア出兵があり、張鼓峰事件、ノモンハン事件がある。ノモンハン事件では、日本は戦死者・戦傷者・戦病者・生死不明者あわせて1万9768人の損害を蒙り、負けた、と書く。

ロシア政府は、シベリアで重労働を強制され、病気でも働かされた日本人抑留者に何もしていない。「あげくの果てに屍となりシベリアの永久凍土に身を横たえることになった人々に対しても、その一部の名簿を手渡ただけで何もしていないのである。そして、それどころか、いまは彼らのお墓は荒れ果て、ひどいのはそれがどこにあるのか所在さえ不明になったものもあり、彼らの御霊は安らぎの場を見出せないでさ迷っている。すなわち、シベリア抑留者たちの労苦も犠牲も報われないままになっているのである」（575）。

日本政府も1988年に一人あたり10万円の弔慰金と銀杯を配布したのみで、全国抑留者補償協議会の補償要求には応じないままである。ソ連における日本人捕虜の生活体験を記録する会の代表として、全8巻の『捕虜体験記』を刊行した高橋大造は、実現すべき5つの課題として、「根本原因の解明と抑留体験者への国家補償の確立、さらには、不運にも望郷の念にこころを焦がしながら亡くなられた全戦友たちの霊をねんごろに弔うとともに、このような無惨な体験を再び繰り返さないための歴史教育の確立と抑留生活の実態を伝えるための資料の保存」を挙げている（『四十六年目の弔辞、極東シベリア墓参報告記』1993, 190）。

1945年に20歳前後であった抑留者も80歳となり、生存者は年々少なくなっている。

しかし、ここで一部紹介したような、若い60万人もの男子日本人が生活と労働のなかで、同じように苦しい生活をしてきたロシア人との交流のなかでえた心の底からの声は、今後の日露関係形成のひとつの基礎となり得るし、生かしていかなければならない。